Osaka University Knowledge Archive

Title	＜紹介＞堤和博著『和歌を力に生きる―道綱母と蜻蛉日記―』
Author(s)	青山, 絵美
Citation	語文. 2010, 94, p. 59-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69155
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

紹　介

堤和博著『和歌を力に生きる―道綱母と蜻蛉日記―』

青　山　絵　美

本書は、藤原道綱母を「普通の貴族以上に和歌にこだわり、和歌を力にして生きているというような生き方をしていた」（はじめに）という視点から捉えることから、『蜻蛉日記』上巻前半を解釈・考察するものである。

和歌一首ずつの解釈と、その和歌が場面解釈にもたらすものを、ひとつひとつ考察することから、散文の記述からでは見えない道綱母の姿を探るのが、本書の大きな目的のひとつといえるだろう。『蜻蛉日記』においては、重大な事件であっても、心境の変化の機微の明示がされないこともあるため、「歌が詠まれているかいないか、詠まれていても、相手に贈られているかいないか」が『蜻蛉日記』上巻前半において重要であると、筆者は説くのである。

例えば、兼家と結婚に至るまでの場面では、当初の頑なな態度から打ち解けるまでの道綱母の心情の変化が記されておらず、一見唐突な印象を与える。しかし、筆者は、これまで兼家への返歌を拒み、侍女の代筆ですませていた道綱母が、直接返歌をし始めること自体が、心情の変化を表しているのだ、とする。

また、町の小路の女と兼家との関係が発覚したのちの天暦十年の桃の節句の場面においては、一見明るい雰囲気であっても、歌を手習いに書きつけて、兼家に直接贈っていないことから、道綱母の気持ちは落ち着ききっていないことを指摘する。

このような場面を読み解きながら、著者は繰り返し、道綱母が「和歌の力」によって生きていることを述べる。

また、道綱母が、和歌を詠むことで、思いを表し、また整理する一方で、陸奥へ向かう父との別れや兼家と町の小路の女との関係を知ったときなど、「感情が高ぶりすぎると歌がでてこない」とする指摘も、本書の柱のひとつであろう。あくまで「和歌」を中心に物語を読むことで、解釈がいかに変わるか、また定められるかというのが、本書を貫く視点である。

丁寧に一首一首の解釈を示しつつ、読者に対しても独自の検証をせまる本書は、『蜻蛉日記』の世界へ分け入る新しい導きとなるだろう。

（新典社、二〇〇九年十月、一五九頁、一〇五〇円）

（あおやま・えみ　本学大学院博士前期課程）